

タイトル： くらしの中のレクリエーション
～共に参加し、共に楽しむ～

キーワード ※3つ記入。

活動と参加	法人名	社会福祉法人 東旭川宏生会
自立支援と重度化防止	施設種別	特養
組織	施設名	特別養護老人ホーム 宏生苑

研究者 (取組に関わった方のお名前5名まで)	氏名	職種	備考
	① 平山 香織	機能訓練指導員	
	② 佐々木 綾子	管理栄養士	
	③ 蓮井 和也	介護支援専門員	
	④ 後藤 卓也	介護職員	1F 介護主任
	⑤ 松山 恵美	介護職員	2F 介護主任

施設の概要

※ここに記載した内容のうち、発表内容に直接重要な関係を持たない事項については、本資料をもって発表の際の説明から省略してください。

設置主体	社会福祉法人	経営主体	社会福祉法人
開設年月日	2009年3月12日	所在市町村	旭川市
市町村人口	321,469 人	65歳以上人口 (高齢化率)	112,803人 (高齢化率35.1%)
利用者定員数	70 人	利用者平均年齢	90.7 歳
職員数	63 人	職員数内訳	介護職47名 看護職6名
併設施設・事業	短期入所(10名)		
施設のサービスの概要	特別養護老人ホーム：長期入居70床・短期入所10床 全室ユニット型 介護理念：入居者1人ひとりに寄り添い、皆様が快適に安心して、安全に暮らして頂けるよう務めていきます		

発表の概要

<p>①取り組んだ課題 全国的に高齢化が進み、特別養護老人ホームでは、医学的ニーズの高まり・重度要介護者の受け入れが進んでいる。さらに、生活の場であると同時に、最終的には入居者の最期を見送るといった、複数の役割を求められている。 当施設においても、入居者の活動性の他、身体機能や認知機能といった個々の特性に対応する為、職員は生活歴や習慣に配慮した個別的な日常生活のケアを目指している。 しかしながら、施設入居者の要介護度が上がるにつれ、余暇活動や入居者同士が交流できる機会の提供に、厳しい状況を感じていた。 また、2020年3月の緊急事態宣言をはじめとする、感染症への警戒が続き、入居者の対人交流・地域への参加機会は大幅に減少していた。 どのような状況であっても、入居者がその人らしく・心身ともに健康に暮らすためには「活動と参加」の拡大が必要だと考え、「レクリエーションに関する組織的な成長」を目指した。</p> <p>②具体的な取り組み 状態が異なる入居者が共に参加する為に、身体機能と身体状況を個性としてポジティブに評価し、残存機能を活用した。 ①感覚的体験 ②自立 ③自己効力感 に着目し、以下2種類のレクリエーションを実施している。 さらに、長期レクリエーションの着手にあたり、実施内容・実施機会・実施規模を経過に応じ、マネジメントした。 【喫茶の会 2022年9月～】 味・香り・音楽等の雰囲気を楽しむ“感覚的体験”や、飲み物の種類を自分で選択する“自立”を意識しながら、喫茶の会を開始した。初期は、小規模集団にて実施ノウハウを構築し、半年後より内容・範囲の拡大を図った。 現在は、実演調理・上映会の同時開催、そしてコミュニティづくり等、内容を拡大したプログラムを実施している。 参加者の増加や内容の拡大に伴い、共同作業や役割が数多く発生した。夏祭りには“喫茶部”として、入居者が活躍する機会を設けた。 【園芸 2023年4月～】 屋内外を問わず園芸実施機会を提供した。土の準備・追肥・剪定等、管理を含めた活動を行い、植物に直に触れる機会を増やした。 さらに、夏から秋にかけて、収穫物を利用した調理や、種の採取等、成果を感じられる活動を積極的に取り入れている。 加えて、入居者の過去の経験を活かし、職員・入居者・家族が協力しながら、施設園芸エリアの拡大を図っている。</p>	<p>③活動の成果と評価 【レクリエーションと暮らしの連動】 新規取り組みを発端にして、喫茶・園芸のみならず、入居者の個性を活かしたレクリエーションが年間を通して提案・実施されている。実施ノウハウや入居者の様子は全体に共有され、日常生活における自立支援・余暇・役割獲得に役立てられている。 【職員のレクリエーションへの関心増加】 入居者の能力を引き出し、日常での「活動と参加」を増やす契機として、“レクリエーション”への関心が高まった。ユニット及び個人から積極的な提案と協力の申し出が得られ、職員の趣味・特技を活かした活動提供に繋がっている。 【施設レクリエーションへの家族の協力と参加】 入居者の参加・活躍の様子を知った家族から、情報提供やなじみの品の寄付といった協力が得られている。また、家族がレクリエーションに参加し、入居者・家族・職員で活動する機会を設けることができています。</p> <p>④今後の課題 残存機能と過去の経験を活かした活動の場の提供は、入居者の参加推進と役割獲得に効果的であった。入居者の将来像を意識し“くらしの中のレクリエーション”の提供を続けていく為に、入居者の声や社会情勢に応じて、レクリエーション計画・運営を進化させていく必要がある。 さらに、入居者の生活史を意識する際、“住み慣れた家”“地域”を無視することはできない。今回の取り組みは、徐々に施設外との繋がりにも広がりを見せてきた。今後もレクリエーションを通して入居者と職員のみならず、施設や地域住民が、共に参加し・共に楽しめるように、“地域”との繋がりの強化に努めていきたい。</p> <p>⑤参考資料など ・特別養護老人ホームにおける個別ケアのガイドライン 一般社団法人 日本ユニットケア推進センター ・認知症をポジティブにとらえる 山口晴保 老健2019.11 ・精神障害と作業療法 山根寛 三輪書店</p>
--	--